探検記または再生産される物語：Ralegh の *Discoverie*

水　野　眞　理

1952 年，一冊の commonplace book（備忘録）が Sir Walter Ralegh のものと鑑定された。そこに，Ralegh の *The History of the World*（『世界史』，1614）との強い結び付きを示す書物のリストが含まれていたのである。それは 1603 年から 1613 年にかけて Ralegh が幽閉されていたロンドン塔の Bloody Tower の一室の書棚の内容を示すものだと考えられている。[1]総数 515 点の中には，ロンドン塔時代以前の出版物が数多く含まれていることから，これが Ralegh が若くから集めた蔵書であると考えてさしつかえないだろう。その中に，スペイン語の辞書，教科書とともに，Acosta, Gómara などの著者によるスペイン語で書かれた新大陸関係の書物が何冊か見られる。それらこそは Ralegh の見た黄金郷の夢に形を与えたものなのである。

スペインの無敵艦隊を撃破してからわずか数年，敵対関係にあったイングランドでは，その関係ゆえに，スペイン側の情報が熱心に収集された。とりわけ，新大陸から運び出される金銀がスペインの国力を支えていると考えられ，イングランド人の関心を誘ったものと思われる。Walter Ralegh は，勅許による私掠船を大西洋からカリブ海に出没させ，スペインに運ばれる金銀を略奪するという作戦から一歩すすんで，黄金の源泉を押えようというアイデアを持つにいたる。そして 1595 年の 2 月から 8 月にかけて自ら南米の黄金郷探索行に出る。黄金郷＝El Dorado はスペインによるインカの征服とその後の探検の過程で伝説化され，信じられるにいたったものである。スペイン人による El

Dorado 探索史は，したがって，彼らの歴史の中で征服史の続編ともいうべき位置を占めている。

Ralegh はそれらの書物や，接触したスペイン人からの情報に基づいて，El Dorado の位置を南米大陸の Orinoco 川流域の Guiana（ギアナ）と判断した。現在の Guyana よりやや西の，Venezuela に属する地域である。さらに，自らの出航の前年には Jacob Whiddon を予備調査に送った上で，宮廷の有力者の援助，エリザベス女王の勅許を得て，探検行は行われた。周到ともいえる準備にもかかわらず，El Dorado は発見されず，わずかに持ち帰られた金鉱石の真実性も疑わしいものとされた。El Dorado 発見によってスペインを凌駕する富をイングランドにもたらし，既に翳りを見せていた宮廷での位置を挽回しようという Ralegh の意図は挫折する。

Ralegh の黄金郷探索記 *The Discoverie of the Large, Rich and Bewtifvl Empyre of Gviana*（1596）（以下 *Discoverie* と呼ぶ）は，失敗に終わった El Dorado 探索の弁明として，また今後の Guiana 進出の正当性を女王に訴える書として，探検の翌年の 1596 年に出版された。従来この書は主として，波乱に満ちた Ralegh の伝記の一材料として，またはイングランドの植民地主義的海外進出史の一資料として取り上げられてきた。本稿はこれを文学テクストとして取り上げ，異文化記述における引用と影響の問題の一端を扱おうとするものである。そこには，一般にはノンフィクションに分類される探検記のフィクション性の問題もおのずと浮かび上がってくるだろう。

もっとも文学テクストとして *Discoverie* をとりあげる試みは Stephen Greenblatt によって既に行われている。Greenblatt はその Ralegh の伝記において，演技するルネサンス人の典型として Ralegh を描き出し，*Discoverie* の言語の矛盾に示される Ralegh の多重な精神構造を指摘している。[2] また Greenblatt は，彼を新歴史主義の教祖的地位に押し上げた書物でも，Edmund Spenser の *The Faerie Queene*（『妖精の女王』，1590–96）が植民地主義の言説に満ちていることを示すために，その第二巻に描かれた Bower of Bliss

（至福の園）と Ralegh の *Discoverie* に描かれた Guiana の風景とを並べて引用している。[3]しかし，そこにおいても *Discoverie* は副次的な位置におかれており，それ自体としての十分な扱いを受けていないように思われる。

Discoverie を論じる上で見過ごすことができないのは，Ralegh 自身の体験よりも，彼が書物あるいは他人から得た情報の占める割合がはるかに多い，ということである。たとえば，El Dorado を目撃したというスペイン人の話，Orinoco・Amazon 両河の流域の地理，Amazones たち，人身売買，解毒の処方，周辺の部族間の抗争，金鉱・銀鉱，頭が肩の下にある部族，など，Orinoco 河口の水路のほんの一部に沿ってしか移動していない Ralegh 一行にはとうてい摑むべくもない情報が *Discoverie* には満ちている。それらはスペイン人をも含む現地人から得られたもの，つまり現地人の「知識」あるいは「物語」の写しということができよう。

また，El Dorado は征服されたインカ帝国の流れを汲むという話，Orinoco 河探検史，動植物誌，Amazones たち，現地人の風習などの記述は，数多くの印刷された情報，すなわち，当時インディアスと呼ばれたカリブ海の島々や南米大陸の探検記・地誌を抜きにしては考えられない。さらに，巻末には付録として，拿捕したスペイン船から入手した El Dorado に関する 10 篇にのぼる書簡や報告を英訳して載せている。*Discoverie* の執筆にあたって，Ralegh が傍らに置いて参照したスペイン語・英語の文献は大量にあったと考えられるにもかかわらず，本文とそれらとの厳密な比較を行った研究は見られない。こういった先行文献によって生産された新大陸の「物語」は *Discoverie* のなかにどのように再生産されているのだろうか。

新大陸を訪れたヨーロッパ人の生んだ物語のテーマの一つは，その驚異的な動植物であった。Orinoco 河口沖の島 Trinidad にひとまず投錨した Ralegh もまた，この島の驚異を書き留めている。探検者の常として海岸沿いに真水の流れ込む川を調べるうちに，彼はそこで，樹上に棲息する牡蠣を見る。

> ...one salt riuer that had store of oisters vpon the branches of the trees, & were very salt & wel tasted. Al their oisters grow vpon those boughs and spraies, and not on the ground: the like is commonlie seene in the West Indies and else where. This tree is described by *Andrewe Theuet* in his french *Antartique*, and the forme figured in his booke as a plante verye strange, and by *Plinie* in his XII. booke of his naturall historie. But in this Ilande, as also in *Guiana* there are verie manie of them.[4]

> 木の枝にたくさんの牡蠣のいる塩水の川があった。それらはとても塩辛く，美味であった。それらの牡蠣はすべて地面でなく枝や小枝に育つ。同様のものは西インドその他で普通に見られる。この木はアンドレ・テヴェがその『南極フランス』に描写しており，その書では，ごく珍しいものとして絵が載っている。また，プリニウスがその自然誌の第12巻で描写している。しかし，この島でもギアナでも，それらはいくらでもあった。

Thevet と Plinius，同時代と古代から自然誌の権威を引いてでたらめを書いているのでないことを強調すると同時に，彼らが「珍しい」としたものが「普通に見られる」と書くことで，Ralegh は新大陸の驚異を演出する。ところが，Plinius の自然誌に書かれているのは干満の差の大きい水辺に生える樹木のことのみであり，牡蠣のことは言及されていない。[5]一方，ブラジルの入植地に滞在したフランス人 Thevet による Janeiro 河の樹上の牡蠣の描写は，たしかに新大陸の驚異の一つとしながらも，それが潮の干満によってもたらされる現象であることを科学的に説明する文章である。[6]Ralegh はその説明を故意に省略し，牡蠣が「枝に育つ」と断言することで，彼自身が予備知識もあり，見て理解し得たはずのことを，ことさら奇異なものに見せている。*Discoverie* がそのフィクション性を露呈する瞬間である。

新大陸の物語のさらに重要なテーマは，黄金の探求である。El Dorado の由来とその探索の歴史の記述は 101 ページある *Discoverie* 本文の約 4 分の 1 をしめる。これは，Ralegh の一行が，Trinidad 島に到着したくだりの後，Orinoco 川遡航の記述の前に挿入されている。ここで Ralegh 自身の探検の記述は冒頭に近いところで約 25 ページにわたって延期される。このながながとし

た挿入部分の意図するところは，この後に記述される Ralegh の探索は結局失敗に終わるけれども，El Dorado は本当は存在し，それを探検することの妥当性はいぜんとして動かない，という一種の予防線とも受け取れる。しかし，その内容が El Dorado の由来，そして新大陸の征服と Orinoco 河の探検の勇者たちの歴史であることを考えると，この挿入はこの探検記のエピック・ロマンス性の一面とも考えられる。エピック・ロマンスにおいて物語の途中で説明のための長い挿入を置くことは常套であるからである。たとえば，Spenser の *The Faerie Queene* の第二巻では，騎士 Guyon と Arthur が重要な冒険に出発する前に，それぞれ自分の生国 —— 妖精の国とブリタニア —— の歴史を読む場面がある。[7]語り手が引用する，という形をとって，それらの歴史は二人の冒険を中断し，遅延する。Ralegh が Orinoco 河の探検のくだりの前に，先行する探検者の歴史を挿入しているのは，構造的にはこれと重なりあうものと見なし得よう。過去の歴史／物語（histoire）を挿入することによって，Ralegh はみずからの探検行がそれによって力を与えられ，それを反復し，超えるものであることを主張するのだ。実際，Ralegh 自身が単なる黄金郷の探索者にとどまらず，スペイン人を凌駕する征服者（conquistador）になる可能性を意識していることを，*Discoverie* は示している。

> But it pleased not God so much to fauour me at this time:. . . if any else shalbe enabled thereunto, and conquere the same, I assure him thus much, he shall performe more then euer was done in *Mexico* by *Cortez*, or in *Peru* by *Pacaro*, whereof the one conquered the Empire of *Mutezuma*, the other of *Guascar*, and *Atabalipa*. . . .[8]

> 今回は神は私に味方し給わなかった。（中略）もし，他の誰かがその事業に成功し，それ［ギアナ帝国］を征服するならば，私は保証しよう，その者はコルテスによってメキシコで，ピサロによってペルーで行われたこと（前者はモクテスマの帝国を，後者はグアスカルとアタバリパの帝国を征服したのだが）それらにもまさることをやり遂げることになる，と。

また，Ralegh の *Discoverie* のタイトル――『広大で，豊かで，美しいギアナ帝国の発見』――は，Hernán Cortés によるメキシコ征服についての報告書簡が出版されたときのタイトルに驚くほど似ている。

> *Carta de relacio[n] .... En la q[ua]l haze relacio[n] d[e] las tierras y provi[n]cias sin cue[n]to q[ue] ha descubierto nueuamente... En Especial haze relacio[n] de una grandissima provincia muy rica llamada Culua: y de grandes ciudades y de maravillosas edificaciones....*[9]

> 報告書簡……そこでは彼［コルテス］が最近発見した無数の土地と地方についての報告を行っている……とりわけ，クルアと呼ばれる極めて大きく，豊かな地方について，また大きな町々と驚くべき建物についての報告を行っている……

これは Ralegh に先立つこと約 70 年の言説である。Cortés もまた書簡の中で，彼が征服していった土地の広大さ，豊かさ，そしてタイトルにはないもののその美しさについて言葉を費やしている。残念ながら Ralegh の備忘録には Cortés の書簡は載っていないので，彼がそれを見たのかどうかは知ることができない。しかし，見たにせよ，見ていないにせよ，ヨーロッパ人が新大陸に何を発見したか――というよりむしろ，何を発見したかったか，というべきであろう――が 70 年の年月を経てもいささかも変わっていないことは興味深い。

もちろん Ralegh は，先行する物語をただ繰り返しているわけではない。El Dorado の起源がインカ帝国にあると考える Ralegh はスペインの歴史家 Francisco López de Gómara の著書 *La historia general de las Indias*（『インディアス概史』1554-55）からインカの黄金に関する記述を 2 箇所引用している。上記の備忘録にも載っている Gómara のこの書物は，Mexico の征服を扱った部分と Peru の征服を扱った部分の二部構成をとっていた。[10]Ralegh の引用は Peru 部分からスペイン語による原文をあげ，次に英訳を付す，という念の入れようである。しかし，考えてみると，ここでは Ralegh 自身の英訳があれば十分であり，わざわざスペイン語の原文を載せる必要はないはずである。

したがって，Ralegh が原文と自らの英訳を併記しているのは，情報の真憑性を強め，合わせて自らのスペイン語力を誇示するため，と考えるのが自然であろう。彼が探検を行ったのは，Mexico や Peru ほどは徹底していないもののスペインの勢力がおよんでいる地域であり，このくだり以外にも多くのスペイン人からの情報を Ralegh は盛り込んでいるのである。しかし，Ralegh の英訳には小さな誤りとみられるものに加えて，作為的と見られる原文との相違がある。その部分を検証してみよう。

Ralegh は Gómara の *La historia general* の 120 章の一部を引用している。「一方によって他方を判断出来るように」，すなわち，インカの黄金の描写によって El Dorado の富を読者が想像できるように。「そこには Guiana の皇帝の先祖にあたる Guaynacapa の宮廷と壮大さが描写してある」。Gómara の原文と Ralegh 自身の英訳を並列して引用する。イタリック体の部分が Gómara による原文で，ローマン体の部分が Ralegh の文章である。両者の相違は下線をつけた部分である。Ralegh は基本的には逐語訳をめざしているので，とりあえずスペイン語にそって邦訳をつける。

> *Todo el servicio de su casa, mesa, y cozina era de oro, y de plata, y quando menos de plata, y cobre por mas rezio. Tenia en su recamara estatuas huecas de oro que parecian gigantes, y las figuras al propio, y tamano de quantos animales, aues, arboles, y yeruas produze la tierra, y de quantos peces cria la mar y aguas de sus reynos. Tenia assi mesmo sogas, costales, cestas, y troxes de oro y plata, rimeros de palos de oro, que pareciessen lenna raiada para quemar. En fin no auia cosa en su tierra, que no la tuuiesse de oro contrahecha: y aun dizen, que tenian los Ingas vn vergel en vna Isla cerca de la Puna, donde se yuan a holgar, quando querian mar, que tenia la ortaliza, las flores, y arboles de oro y plata, inuencion y grandeza hasta entonces nunca vista. . . .*

That is, All the vessels of his house, table, and kitchin were of Gold and Siluer, and the meanest of siluer and copper for strength and hardnes of the mettal. He had in his wardroppe hollow statues of golde which seemed giants, and

the figures in proportion and bignes of all the beastes, birdes, trees and hearbes, that the earth bringeth forth: and of all the fishes that sea or waters of his kingdome breedeth. Hee had also ropes, budgets, chestes and troughs of golde and siluer, heapes of billets of golde that seemed woode, marked out to burne. Finally there was nothing in his countrey, whereof hee had not the counterfeat in gold. Yea and they say, The Ingas had a garden of pleasure in an Iland neere Puna, where they went to recreate themselues, when they would take the ayre of the sea, which had all kind of garden hearbes, flowers and trees of Gold and Siluer, an inuention, & magnificence til then neuer seene. . . .[11]

彼の家，テーブル，キッチンのすべての道具は黄金か，銀か，悪くとも強度を増すために銀と銅でできていた。彼はその倉に巨人のように見える中空の黄金の像や，大地が生み出すあらゆる獣や鳥や木や草花，また彼の王国の海や淡水が生み出すあらゆる魚と同じ形，大きさの像を持っていた。また彼は黄金や銀の綱や大袋や籠や穀物入れや，積み上げられた黄金の棒を持っていた。それらは火にくべるために割った薪のように見えた。要するに，彼の領土の生み出す物で，彼がその黄金製の模造品を持たないものはなかった。さらに，インカ族はプーナの近くの島に花壇をもっており，海の空気にあたりたいときはそこへ休みにいくと言われている。[12]そこには金や銀でできた野菜や花や木々があって，かつて見られたことのない着想と規模のものだった。

スペイン語の原文にある troxes（穀物入れ）と raiada（割られた：rajar 割る，の過去分詞。rayar 線を引く，印をつける，の過去分詞ではない）が Ralegh の英訳では trough（飼葉桶），marked out（印を付けた）と英訳されているのは，意図的ではない単純な誤りと考えられる。しかし，スペイン語で単に vergel（果樹園，花壇）となっているところを，Ralegh は garden of pleasure（快楽の園）と訳している。また，そこにある植物について Ralegh が言っている all kind of あらゆる種類の，にあたるものはスペイン語のほうには見当らない。これは意図的だと思われる。garden of pleasure ということばが想起させるのは，騎士道ロマンスの快楽の園である。おそらく Ralegh の脳裏には，そのなかでも，彼自身と親しい関係にあった Spenser の *The Faerie Queene* 第二巻の Phaedria の島や，至福の園があったのではないだろう

か。[13]歴史的アレゴリーによって Elizabeth I 世のイングランドを映し出した *The Faerie Queene* において，騎士 Guyon は妖精の国を出発し，船で Acrasia の園のある土地へ渡る。園の入口のアーチに絡みつく葡萄の実は「磨き上げた黄金で／人工に作られた」(of burnisht gold, / So made by art) ものだ。

There the most daintie Paradise on ground,
　It selfe doth offer to his sober eye,
　In which all pleasures plenteously abound,
　....
The art, which all that wrought, appeared in no place.[14]

そこには地上でもっとも贅沢な楽園が
　真面目な彼の目の前にひらけており，
　あらゆる快楽が満ち溢れていた，
　……
それらを細工したのは人工の技だったが，とてもそうとは見えなかった。

Ralegh は Gómara の差し出す黄金に満ちたインカの風景に，ヨーロッパのロマンスの騎士たちを迎える安逸の雰囲気を付け加えた。Gómara 自身は Mexico の征服者 Hernán Cortés 一族の在俗司祭であり，新大陸の土を踏んだことのない書き手である。古典学者で人文主義者でもあった彼は多くの資料にもとづいて新大陸の物語を書いた。[15]それを Ralegh が英訳し，原文になかったものを付け加え，そして，読者はさらにそれをもとに El Dorado の富を想像させられるのである。El Dorado はこうして，読者からはいくつもの言説の層で隔てられたところに，その姿をかいま見させるにすぎない。

また，El Dorado での黄金の儀式の記述も注意して読む必要がある。El Dorado（原義は「金ぴかの男」）の伝説は，Sebastián de Benalcázar という探検者の部下の一人がインディオから聞いた最初の形では，Bogota のあたり

の部族の首長が毎朝金粉を体に吹きかけさせ，それを湖で洗い流す，というものであった。[16]その後，この伝説には細部が加わり，Guatavita という湖[17]で，毎年一回付近の部族があつまり，首長が体に金を塗って舟で湖に乗りだし，多くの黄金製品を湖に投げ込むと同時に自ら水中に飛び込んで金を洗い落とす，という風に変化していった。Ralegh の *Discoverie* においては，これが，さらに変化していく。

> ...at the times of their solemne feasts when the Emperor carowseth with his Captayns, tributories, & gouernours, the manner is thus. All those that pledge him are first stripped naked, & their bodies annoynted al ouer with a kinde of white *Balsamum*:...certaine seruants of the Emperor hauing prepared gold made into fine powder blow it thorow hollow canes upõ their naked bodies, untill they be al shining from the foote to the head, & in this sort they sit drinking by twenties and hundreds & continue in drunkenness sometimes six or seuen days togither: the same is also confirmed by a letter written into Spaine which was intercepted, which master *Robert Dudley* told me he had seen.[18]

> ……厳粛な祭のときには，ギアナ皇帝は支配下の首長や進貢者や総督たちと酒を飲み騒ぐのだが，そのやり方はこんな風である：皇帝に忠誠を誓うものは全員，まず丸裸にされ，全身にある種の白い香油を塗られ……皇帝の召使が細かい粉にした金を用意して，彼らの裸の体に中空の籐の管を使ってそれを吹き付ける。すると彼らの体は爪先から頭まで光り輝くようになる。この格好で彼らは何十人，何百人と集まって座って酒をのみ，ときには六日，七日も通して酔っぱらい続ける。このことは，スペインに送られる途中でイングランド側に入手された書簡によっても証明されるが，ロバート・ダドリー氏がその書簡を見たというのを私は聞いた。

金粉を塗布される人物は，一人の王から複数の「首長や進貢者や総督たち」になっている。Ralegh の El Dorado では，黄金はそれほどまでに満ち溢れているのだろうか。Fig. 1 は新大陸の光景の視覚的表現に貢献した Theodor de Bry の版画であるが，黄金の儀式を描写したさまざまの文献の中では，この Ralegh の記述にもっとも近いものである。前景では一人の人物が裸になり，

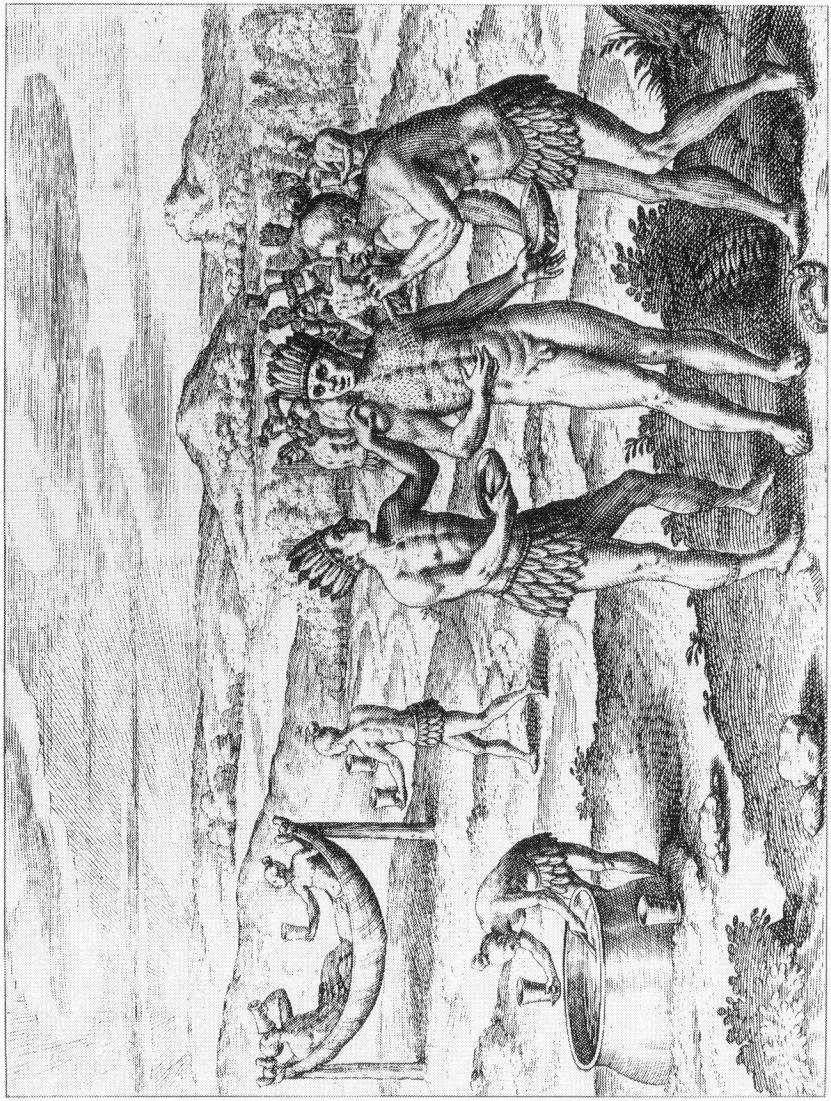

Fig. 1

足元には羽飾りと黄金の足輪らしきものがはずしておいてある。彼は左の人物によって香油を塗られ，右の人物によって金紛を吹き付けられている。後方では多くの首長らしき人々が円陣をなして呑み騒いでいる。[19]

Ralegh の情報源は，現地のスペイン人 Anthonio de Berreo であり，Berreo はそれを San Juan de Puerto Rico に保管された公文書から写したと言っており，その公文書は El Dorado を実際に見たというスペイン人の話を聞いたという聴罪司祭の報告から作成されている。また，それを証明するというスペイン側の書簡は，Dudley が見た，というのを Ralegh が聞いた，とされている。[20]ここには，物語が生まれ，変容し，そして書き手とわずかに間接的にでもつながりのあるものにされていく過程が見て取れる。黄金は，直接眼にすることはできないが，しかし，探索するものを絶望させない程度の近いところに存在の痕跡を残すのだ。

Ralegh は誇らしげに言っている。'The countrey is alreadie discouered' (99) と。しかし，彼は El Dorado を発見（discover）したのではなく，Orinoco 河口付近を探索（discover）したにすぎない。その意味では書名の *Discoverie* は，意図的に誤読を誘うものといえるだろう。Orinoco 河を苦労してさかのぼりながら，Ralegh は現地の案内人に「明日は目的地につける」「とにかく次の曲りまで」と，隊員たちに嘘の約束を言わせ続けなければならなかった。

> When three daies more were ouergone, our companies began to despaire, the weather being extreame hot, the riuer bordered with verie high trees that kept away the aire, and the currant against vs euery daie stronger than other: But we euermore commanded our pilots to promise an end the next daie, and vsed it so long as we were driuen to assure them from fower reaches of the riuer to three, and so to two, and so to the next reach.[21]

> それから三日が経つと，我々の隊員たちは絶望しはじめた。気候は極めて暑く，河の両岸は高い木が生い茂って風通しが悪く，我々の方向にさからう流れは一日ごとに強く

なったからである。しかし，我々は常に水先案内人に明日は目的地につける，と約束させつづけた。そして，それを利用してあと河の曲りを4つ，3つ，2つ，そして次の曲りまで，と保証していくはめになった。

これは Columbus が第一回の航海で航行距離について船員をだましつづけたのを思わせる。[22] *Discoverie* の読者もまた，探検隊員同様，「次のページには El Dorado が，少なくとも黄金に関する確かな情報が」と思わされ続ける。しかし，その期待がかなえられることはない。

探検記を書くことは，探検を行うのと同様，真実から読者＝同行者を隔て続けることであることを *Discoverie* は教えてくれる。それは，恐らく，当時溢れるように書かれた航海記，探検記に共通する本質的な問題ではないのだろうか。Richard Hakluyt と Samuel Purchas が編んだ旅行記大全もまた，引用の巨大なかたまりと見なすことができる。[23] それらのテクストを成立させているもとの情報にも，さらにまたそれらを成立させているもとの情報があり，El Dorado の，新世界の，異文化の「物語」は少しづつ変型されながら果てしなく引用され，再生産されつづけた，といえるのではないだろうか。

本論文は平成6年度文部省科学研究補助金（一般研究C）を受けて行われた共同研究「英国人による非ヨーロッパ文化に対するイメージの形成の研究」の成果の一部であり，1994年5月21-22日熊本大学において開かれた日本英文学会第66回大会での研究発表の原稿に加筆訂正したものである。執筆の段階で京都大学の蒲池美鶴氏，大阪大学の Paul A. S. Harvey 氏より貴重な助言を受けた。また，奈良女子大学の吉田幸子氏，京都大学の櫻井正一郎氏，京都外国語大学図書館には資料を貸与していただいた。記して感謝を表したい。

注

1）Walter Oakeshott, 'Sir Walter Ralegh's Library', in *The Library*, 5th Ser., Vol. XXIII, No. 4, Dec. 1968, 285-327.

2) Stephen Greenblatt, *Sir Walter Ralegh: The Renaissance Man and His Roles* (New Haven: Yale U. P., 1973), 99-112.

3) Greenblatt, *Renaissance Self-Fashioning: From More to Shakespeare* (Chicago: Univ. of Chicago Pr., 1980), 180.

4) Sir Walter Ralegh, *The Discoverie of the Large, Rich and Bewtifvl Empyre of Gviana* (London, 1596; rpt. Amsterdam and New York: Theatrum Orbis Terrarum, 1968), 2.

5) *Plinii Naturalis Historiae*, Book XII, xx. そこで Plinius は紅海とペルシア湾を混同しており，そこに生える珍しい木のことを次のように述べている。「それらの木は潮がひくと海岸に現れているが，タコのような裸の根で不毛の砂を抱いており，その根は潮におかされ，波に洗われ，高く取り残されて乾いた幹のように見える。これらの木は潮が満ちると波に打たれてもじっと立っている。実際水位が高いときは，それはすっかり没してしまう。そしてこの事実による証拠は明らかに，この種の木は塩水によって養われるのだということを物語っている。」中野定雄他訳『プリニウスの博物誌』II（東京：雄山閣，1986），542.

6) André Thevet, *Les singularitēz de la France antarctique, autrement nommée Amerique: & de plusieurs Terres & Isles decouvertes de nostre temps* (Paris, 1557). これは 10 年後に英訳されてイングランドでも広く読まれたようである。それによれば，樹上の牡蠣に関する文章は次のようになっている。

> In this lande or coũtrey about the riuer before named, are trees growing on the sea borders or brinkes, couered with oysters alwayes to the very top: you shall understande, that when the sea swelleth, it casteth the floud very high, and far on the lande twise in .24. houres, so that the water couereth often tymes these trees, so that the oysters being brought in by these springtydes, take holde, and close against the branches, being of an vncredible multitude, . . .

Andrewe Thevet, *The New found worlde, or Antarctike, wherein is contained wõderful and strange things*, . . . (London, 1568; rpt. Amsterdam and New York: Theatrum Orbis Terrarum, 1971), 42.

7) Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, Book II, Canto x, 5-68, 70-76.

8) *Discoverie* 9.（下線は筆者）

9) Hernán Cortés, 'Segunda Carta-relacion', *Cartas de relación* (Sevilla, 1522), ed. Mario Hernández (Madrid: Historia 16, 1985).（下線は筆者）

10) Francisco Lopes de Gómara, *La historia general de las Indias y Nueva Mundo,*

con mas la conquista del Peru y de Mexico (1st ed. 1552; Saragossa, 1554-55). スペイン人による新大陸征服の愛国主義的な記述のゆえにスペイン本国では初版から数年に渡り版を重ねるほどの人気を博したが，4年目にスペインの Consejo de las Indias（インディアス諮問会議）から出版を差し止められている。Mexico 征服に関する部分は *Discoverie* の出版当時すでに英訳が出版されている：*The pleasant historie of the conquest of the WEAST INDIA, now called New Spayne, . . . most delectable to Reade: translated . . . by T(homas) N(ichols).* London, 1578.

11) *Discoverie*, 11-12.

12) Gómara が言及している Puna という地名は Hernán Cortés が Peru を征服した行軍で，海から上陸した地点であるため，スペイン人には特別な意味を帯びている。スペイン人の新大陸征服を糾弾し続けた神父 Bartolomé de Las Casas は，Gómara の *La historia general* と同年に出版された *Brevíssima relación de la destruyción de las Indias*（『インディアスの破壊についての簡潔な陳述』1552）の中で逆の立場からスペイン人によるこの島の破壊を嘆いている。Las Casas の Puna の描写にはロマンス的な誇張がない。当時，イングランドで反スペイン宣伝にも用いられた英訳を見ても，Gómara との姿勢の相違は歴然としている。

'In an Ilande neere to the same prouinces, named Pagna, well peopled and pleasant, the Lord thereof with his people receiued them as it had been angels from heauen: and sixe monethes after, when as the Spanishe had eaten vppe all theyr prouision: They discouered also vnto them the corne whiche they kept under grounde, for them selues, their wiues and their children, against a drie time and barren: making them offer of all, with trees plentiful, spende and eate at theyr pleasure. . . . with other cruelties great and notable which they committed, dispeopling as it were all that Ile.' *The Spanish colonie, or Briefe chronicle of the Acts and gestes of the Spaniardes in the West Indies* . . . Tr. M. M. S. (London, 1583; rpt. Amsterdam and New York: Theatrum Orbis Terrarum, 1977), K2v-3r.

Las Casas が「その地方の近くの Puna という名の島」と特定しているのに対し，Gómara は「Puna の近くの島」とぼかした表現でとほうもない黄金の島の話を作り上げていることは注意を要する。

13) Ralegh と Spenser の個人的な関係は次のようなものである。Ralegh は 1589 年に Spenser を Elizabeth I に引き合わせているし，*The Faerie Queene* の出版にさいして推薦文（commendatory sonnets）を書いている。当然のことながら，最初にのべた備忘録にもその書名があがっている。Spenser は *The Faerie Queene* に Ralegh への献呈のソネットをつけており，Ralegh に宛てた書簡という形で作品の意図を解説している。Spenser は Ralegh がアイルランドを訪れた折のことを *Colin Clouts Come Home*

Againe（執筆 1591？出版 1595）に書き，その中で，Ralegh を Shepherd of the Ocean（大洋の羊飼い）と呼んでいる。*The Spenser Encyclopedia* の Ralegh の項の執筆者 Jerry Leath Mills は patron-poet の関係だと言っている。*The Spenser Encyclopedia*, eds. A. C. Hamilton, et al. (Toronto: Univ. of Toronto Pr., 1990), 584-585.

14) *The Faerie Queene*, Book II, Canto vi, 58.

15) とりわけ Gonzalo Fernández de Oviedo y Valdés の *Historia general y natural de las Indias* (1547) に依拠している。D. A. Brading, *The First America: The Spanish monarchy, Creole patriots, and the Liberal state 1492-1867* (Cambridge: Cambridge U.P., 1991), 46-53. 実際に新大陸の征服に参加した Bernal Díaz del Castillo が自ら征服記を書いたのは，Gómara のこの書物の Mexico 部分が真実を伝えていないと考えたからだという。Brading, 51-52.

16) *The Times Atlas of World Exploration* (London: Harper Collins, 1991), 125.

17) 現在の地図では Guatavita という名の湖は Columbia の首都 Bogota の北東にあり，17 世紀には水路をうがって湖を干し上げる試みもなされた。これがその伝説に当る湖であるとすれば，Ralegh はそこからずいぶん東へ（つまりヨーロッパの近くへ）El Dorado を引き寄せたと言わねばならない。

18) *Discoverie*, 16-17.

19) Theodore de Bry, *Americae*, Pars VIII, repr. in *The Times Atlas of World Exploration*, 125. Bry の銅版画による新大陸誌は 13 部からなり，1590 年から 1634 年にかけて順次出版された。Ralegh の備忘録にはその最初の 6 部（1590-96）が含まれているが入手されたのが *Discoverie* 以前であるか以後であるかは不明である。さらに，Ralegh の記述とここにあげた De Bry の銅版画とのいずれが先にあったのか興味深いが，これも不明である。

20) ただしこの点に関する Dudley 自身の記述は次のような簡潔なものになっている。'Also he [=king of Tivitivas] told them of another rich nation, that sprinkled their bodies with the poulder of gold and seemed to be guilt, and farre beyond them a great towne called El Dorado, with many other things.' "Robert Dudley's Voyage to the West Indies, 1594-95, narrated by himself" in *The Voyage of Robert Dudley, . . . to The West Indies, 1594-95*, ed. George F. Warner (London: Hakluyt Society, 1899), 74-75, rpt. from Richard Hakluyt, *Principal navigations, voiages, traffiques, and discoveries of the English Nation*, . . . (1598-1600), iii.

21) *Discoverie*, 44.

22) 「九月九日，日曜日／この日は十五レグア進んだが，提督は実際に航行した距離よりも少なめの勘定をすることにした。それは，航海が遠距離に及んで，船員達がおそれを抱いたり，気力を失ったりすることがないようにと考えたからである。」『コロンブス航

海誌』（林屋永吉訳，岩波書店，1977），18.

23) Richard Hakluyt, *Divers voyages touching the discouerie of America*...(1582), *The Principall navigations, voiages and discoveries of the English nation,*...(1589), *The Principal navigations, voiages, traffiques, and discoveries of the English Nation,*... (1598-1600); Samuel Purchas, *Purchas his pilgrimage*...(1614), *Hakluytus posthumus, or Purchas his pilgrimes*...(1625).